

「たまたま」

作…佐藤剛史

〈登場人物〉

- ・ 沙耶香
- ・ 徹
- ・ 医者
- ・ 父
- ・ 母
- ・ 朱美
- ・ 管理人

〈一場〉

明かりがつく。

舞台にはテーブルとソファ。

おなかの大きい沙耶香が牛乳パックごと牛乳を飲み干す。

沙耶香 あ、動いた。

徹が奥から飛び出してくる。

徹 ほんとか？

沙耶香 あっという間ね。

徹 そうだな。おい、また牛乳飲んでたのか。一日何パック飲んでるんだ？

沙耶香 ニパックだけよ。それに牛乳は骨になるんだから、きつと丈夫な子が産まれるわよ。

徹 にしても、飲みすぎでお腹の調子悪くなったりしないのか？

沙耶香 おなかの調子は大丈夫だけど、最近の検診でエコーの映像が見辛くなってるって。脂肪つき過ぎちゃったのかしら。

徹 医者は何て言ってるんだ？

沙耶香 「問題ありませんが、何かあったらすぐ連絡を下さい」って。

徹 なら大丈夫だろ。何も問題ないんだから。

沙耶香 そうね。

徹 それよりも、そろそろ名前考えないか？

沙耶香 そうね。まだちょっと早いけど、どうせ悩むと思うし。

徹 女の子だったら俺がつけていいか？

沙耶香 また凝った名前とかつける気でしょ。

徹 だってせっかくなんだから、縁起の良い漢字とか、画数とかあるだろ。

沙耶香 女の子なんていつかはお嫁に行くのよ。あんまり画数とか気にしても将来の苗字でどうなるか。

徹 嫁に行くのかぁ・・・

沙耶香 何年先の想像してるのよ。まだ性別だって確認してないんだから。覚悟があるなら今度の検診で聞いてくるけど。

徹 いや、こういうものは神秘的なものだから、生まれてくるまでの楽しみにしようよ。

沙耶香 私としては出産前にいろいろ買って準備もしたいんだけどな。

徹 また現実的なんだから。少しは夢を見たらどうだ。

沙耶香 夢見てるわよ。さっきだってカタログ見ながら考えてたのよ。

徹 だから、買う物だけじゃなくなってるな。

沙耶香 そうだ。徹も見ると？

徹 うん、まあ。

沙耶香 じゃあ取ってくるね。

立ち上がる沙耶香。

沙耶香 あ、いたた・・・

徹 どうした？

沙耶香 大丈夫よ、ちょっとお腹がはる感じがしただけ。

徹 牛乳の飲みすぎじゃないのか？

沙耶香 トイレ行ってくるね。

徹 大丈夫か？ 何かあったら呼ぶんだぞ。

沙耶香 はいはい、わかってるわよ。

沙耶香は部屋を出て行く。

徹 どうしてあいつはああも現実的なんだ？ 俺なんか待ち遠しくて落ちて着かなくて。夢が大きくなりすぎてどうしようかなって

沙耶香の声 あく！
徹 どうした？ 沙耶香！

奥から沙耶香の声。
部屋を出て行く徹。
暗転。
「スッポーン！」という音。

へ二場

明かりがつく。
沙耶香の平らになったお腹に聴診器を当てている医者。

沙耶香 先生？

医者 …

沙耶香 先生！

医者 ああ、大丈夫です。異常ありません。

沙耶香 「異常ありません」って、大いに異常があるでしょ！

医者 母子共に健康です。

沙耶香 健康かもしれないけど、おかしいでしょ！

タオルに包んだ卵を抱えた徹が出てくる。

徹 落ち着けよ、沙耶香。

沙耶香 だって卵よ！ 私、卵産んじやったのよ！ それも、こん

なダチョウの卵よりも大きな卵。私の子供はダチョウ？ 私は

鳥類だったの？

医者 爬虫類も卵を産みますよ。

沙耶香 …私、頭がおかしくなっちゃったの？

医者 こういう方は結構いらっしやいますよ。

沙耶香 卵を産む？

医者 ええ。私も実際に見るのは初めてですが、九州地方ではいくつか報告例があるんです。しかし、この辺りでは初めてなんじゃないですかね。

徹 そんな話聞いた事無いですよ。

医者 まだ大っぴらには発表できないんですよ。下手に表沙汰になつてマスコミが興味本位で群がってくると大変ですから。

沙耶香 それは困るわ。私たち、見世物になっちゃうの？

医者 そうならなないために、このことはあまり外部には洩らさない方がいいでしょう。

徹 でも、このお腹は。

医者 外出する時は詰め物をした方がいいでしょね。

沙耶香 両親には何て？

医者 この状況を受け入れてくれそうなら両親ならいいんですが……

徹 黙っていよう。

沙耶香 ええ。良心が痛むけど。

医者 両親に良心が痛む……知らない方が幸せな事も世の中にはありますからね。

徹 そうしよう。この事は二人の胸の奥にしまっておこう。

医者が自己主張している。

徹 三人の胸の奥にしまっておこう。

沙耶香 わかったわ。

医者 噂話はどこから広がるかわかりません。産まれてくる子の将来のためにも。

沙耶香 学校でいじめにあったり？

医者 あだ名が「たまごちゃん」になったりしますよ。

徹 それはそれでかわいいけどな。

沙耶香 でも、卵の育て方なんて、どうすれば。

医者 難しく考えなくても大丈夫です。未熟児が保育器の中で育てると考えればいいんですから。

徹 保育器か。確かにある意味、これは早産なんだしな。

医者 そうなんです……えーっと、確かこの辺りに……あった。これを差し上げます。

医者は冊子を二人に渡す。

徹 これは？

医者 万一、卵で産んでしまった方々に配るマニュアル本です。先日の学会でもらってきたんです。私もまだ経験がありませんが、まさかこんなに早く役に立つとは。

沙耶香 あのく

医者 大丈夫、九州の病院にいろいろと聞いておきますから。案内
こっちの方が楽らしいですよ。不安がらずに、楽しいマタニテ
イーライフを送りましょう。

沙耶香 マタニテイーと言っても、もう産んじやったし。

医者 卵も子供も産んでからが勝負です。とりあえず、安産だった
わけですし。大切に暖めて卵を割る瞬間を待ちましょう。

徹 やっぱり、割るんですか？

医者 そりゃそうです。卵なんだから。

沙耶香 まさか、くちばしがあるとか？

医者 そんなわけないでしょう。

沙耶香 そうですよ。

医者 おでこで割るらしいです。

沙耶香・徹 おでこ？

医者 だから少しでこっばちの子になるんですけどね。

徹 でこっばち：・

医者 ま、とにかく育て方はこのマニュアル本にあるので、早速実
践してみましよう。

医者はマニュアル本をめくりだす。

徹 とりあえず、この卵はどうやって置けば？

医者 「卵が割れないように、できるだけ柔らかいものの上に安定
させておくこと。」

沙耶香 あなたが前に使ってたドーナツ型痔持ち専用座布団は？

徹 痔持ち専用とか言うな。

医者 それなら安定しそうですね。お願いします。

沙耶香 はい。

沙耶香は座布団を取りに行く。

徹 部屋はここでもいいのかなあ。

医者 (マニュアル本を読む)「卵はとにかく暖かいところに置くこ
と」。エアコンのある部屋は？

徹 このリビングです。

医者 じゃあ、このソファーにしましょう。

徹 エアコンの近くがいいかな。

徹は卵を抱えたままエアコンの近くへ行く。

医者 「ただし、あまり暑いとゆで卵になる恐れがあるため、温度は人肌程度にすること」。

徹 ……何だか怖いなあ。

沙耶香が座布団を持って戻ってくる。

沙耶香 持ってきました。

医者 ソファーの上に。

沙耶香はソファーの上に座布団を敷く。

徹と医者は卵をソファーに安置する。

徹 食事とか大丈夫なのかな？

医者 「卵を産むまでに蓄えた養分で充分育つ」。

徹 それで最近あんなに食べてたんだな。

沙耶香 あれは卵が養分を蓄えようとしてたからなのね。

医者 しかし、この殻ができるには相当のカルシウムを取ったんでしようね。

沙耶香 ええ。一日牛乳二十パック飲んでましたから。

徹 二十パック？

医者 一日二十リットルですか。なるほど。

沙耶香 あとはとにかく暖めればいいってことかしら。

徹 うん…

沙耶香 どうしたの？

徹 いや、二十リットルって…

沙耶香 ごめん、恥ずかしくって嘘ついてたの。怒ってる？

徹 いや。

沙耶香 あとは何をすれば？

医者 「卵は固定されたままだと、くつつく恐れがあるため、定期的に転卵をする事」。

沙耶香 転卵って？

医者 鳥がよくやるやつですね。

沙耶香 徹、転がすのよ。

徹 転がすって、どうやって？

沙耶香 先生？

医者 ここに図がありました。

徹は図見ながら卵を転がそうとする。

徹 まさかこのまま不眠不休？

医者 「図のような『転卵運動』を産卵後六時間おきに続けること」

徹 六時間おきというと？

医者 とりあえず、産まれた時間から計算しましょう。

徹 産まれた時間は今から一時間くらい前ですから。

医者 では「本日午後零時に産卵」ということで。

徹 計算がしやすいですね。

沙耶香 やっぱり私、産卵したのね。

医者 母子共に健康で何よりです。

暗転。

△三場△

明かりがつく。

卵は籠の中に入っている。徹がその卵を抱えるようにして座っている。

沙耶香が帰ってくる。

沙耶香 ただいま。

徹 おかえり。・・・お腹は？

沙耶香 汗かいちちゃったから、洗濯機のとこに置いてきた。外出するたびにお腹に入れるってのも面倒ね。

徹 普通の妊婦は取り外し出来ないんだから、まだマシだろ。

沙耶香 そうね。先生が言ってた通り、卵の方が楽かも。

徹 よかったじゃないか。

沙耶香 でも、妊娠したっていう実感が日に日に無くなってくるのよね。

徹 そりゃあもう産んじやったんだからな。

沙耶香 なのに、赤ちゃんを抱いてるわけでもない。

徹 そりゃあまだ産まれてないんだからな。

沙耶香 考えるとよくわかんなくなっちゃう。

徹 あんまり考えすぎるなよ。逆に俺なんか妊婦の気持ちがちよっ

とはわかるようになってるぞ。

沙耶香 そうかもね。

徹 やっぱり、これからの「育メン」時代、卵の方が男も子育ての
実感が湧いていいのかもな。

沙耶香 徹、そんなに卵にくつついてると、徹の心臓の音が私の心
音と混ざっちゃうわよ。

徹 お？ そうか？

沙耶香 あ、ヘッドホン外れてる。

沙耶香は卵のところへ。

卵の下からヘッドホンを拾う。

沙耶香 徹。

徹 あれ？ 取れちゃったかな。

沙耶香 わざとやってるでしょ。どいて。

沙耶香は徹を卵から離し、卵にヘッドホンをかける。

徹 俺だって、パパなんだぞ。

沙耶香 何？

徹 娘が父親の心音を覚えて何が悪い。

沙耶香 先生が言ってたでしょ。「なるべくお母さんの心臓の音を録
音して聞かせてください」って。それに勝手に娘にしてるし。

徹 子供がお父さんに懐かなかったら困るだろ。

沙耶香 普通の子供は母親の心音だけで育ってます。

徹 自分の味方につけようって魂胆だな。

沙耶香 何をすねてるのよ。
徹 そうやって、二人で俺を邪魔者扱いにするんだ。そして思春期
になったら、「パパの服と一緒に洗濯しないで！」とか「パパの

後のお風呂は嫌だ！」とか言い出すんだ。

沙耶香 また娘になってる。あのね

玄関のベルの音。

二人は顔を見合わせる。

沙耶香 先生じゃなかったら、体調悪いって言って帰ってもらって。
徹 わかった。

徹は玄関へ。

沙耶香 本当に困ったパパですね。

徹の声 おかあさん！

沙耶香 うそ！

沙耶香は急いで卵をソファーの後ろに隠し、クッションをお腹の中に入れる。

沙耶香の両親が入ってくる。

沙耶香 何で急に来たのよ！

母 あら、ずいぶん言い方ね。

沙耶香 それにお父さんまで。

父 やあ。

沙耶香 体調悪いから来ないでって言ってたでしょ。

母 娘が「体調悪い」って言ってるのよ。心配じゃない。

沙耶香 だからって、突然来ることないでしょ。

母 でも、元気そうね。

沙耶香 え？

徹 沙耶香、あんまり興奮すると貧血が。

沙耶香、立ちくらんだフリ。

父 大丈夫か？

母 貧血なんていつものことよ。

父 お、腹が前に出てるな。こりやあ男の子かな。

沙耶香 性別は聞いてないのよ。

徹 神秘的なものですから。

父 そうだな。

母 あなた痩せたんじゃない？

父 ちゃんと栄養取ってるか？

沙耶香 ちゃんと食べてるわよ。

父 それでも貧血にはなるんだな。

母 食べるものが偏ってるんじゃないの？

父 ほら、煮干とドクダミ茶、持て来たから。

沙耶香 だから嫌いなんだってば。

母 嫌いとか言ってる場合じゃないでしょ。

沙耶香 っていうか、もう意味ないし。

母 なぁに？

徹 ありがたくいただきます。

父 やっぱり体調悪そうだから帰った方がいいかなあ。

徹 そうですね、お父さん。

母 体調悪いから来てるんでしょ。こんな状態じゃ、家の事出来てないんじゃないの？

沙耶香 大丈夫よ。徹もいるし。

母 男の人なんて、こういう時何も出来ないんだから。ほら、掃除も。

徹 今、やろうと思ってたところで。

母 洗濯は？

母を制止しようとする徹と沙耶香。

徹 僕、こう見えて洗濯得意なんですから。

沙耶香 そうなのよ。徹ったら私よりも家事の手際がいいのよ。

母 そうなの？ へえ、人は見かけによらないわね。

沙耶香と徹はアイコンタクト。

沙耶香 ごめんなさい。ちよっとお手洗いに行って来る。

徹 大丈夫か？ 何かあったら呼ぶんだぞ。

沙耶香 大丈夫よ。

沙耶香は出て行く。

残った徹と父と母。

徹 お茶、入れましょうか？

父 そうだな。

母 そうね。

徹 僕が入れてきますから。お二人はここでゆっくりおとなしくお待ちください。

徹は出て行く。

母 ちよつとあなた、沙耶香たちおかしくない？
父 そうか？

母 何かよそよそしいって言うか。

父 いきなり来たからだろ。まあ、結局来ても何も出来ないという
か。かえって気を使わせちゃったかなって。

母 じゃあせっかくだからお掃除でもしていきます？

父 勝手に触らない方がいいんじゃないか？
母 さて、と。

母はソファーの後ろにあるものを見つける。

母 お父さん、これ。

父 なんだ？

母 何かしら。

父 置物にしてはちよつと大きいな。

卵が動いたらしい。驚く父と母。

母 ちよつと、お父さん。これ今、動いたわよ。

父 動いたって、どういうことだ？

二人は卵の入った籠をソファーの後ろから出す。観察する二人。

母 これ、卵に見えなくも無いわね。

父 いや、卵にしては大きすぎやしないか？

母 明らかに隠してあったわよね。

父 卵だから暖めてたんじゃないのか？

母 すみません、お茶っ葉きらしちゃって。

徹が来たので慌てて卵を隠す二人。

父 あ！ お茶っ葉きれてるだと？ あの、だな、その

母 何でもいいわよ。ねえ、あなた！

父 ああ、何でもいいぞ！

母 じゃあコーヒーでいいですか？

父 ああ、いいぞ！ コーヒー大好き！

徹は去る。
ほっとする父と母。

父 何で隠したんだ？
母 何となく。そういうお父さんだって。
父 いや、何となく。

徹、戻ってくる。

徹 そういえば、こっちにドクダミ茶ありましたね。
母 ドクダミ茶は沙耶香のために！ ねえ！
父 そうだ！ ドクダミ茶は嫌いだ！ コーヒー大好き！
徹 そうですか。

徹はドクダミ茶を取ろうとする。

父・母 だから嫌いだって！
徹 いや、台所にしまっておこうと思って。
父 ああ、そうか。

父は徹にドクダミ茶を渡す。

徹 お砂糖は？
父 お砂糖？
母 任せるわよ。
徹 ミルクは？
母 任せるって言ってるでしょ！
徹 はい。

徹は去る。

二人は徹がいなくなったのを確認。

母 これ、何なのかしら？
父 卵だろ。
母 何の卵なのよ。
父 まさか孫なんてことないよな。

母 …

父 かあさん！

母 まさかね。

父 びっくりさせるなよ。聞いた事無いぞ、人が卵を産むなんて。母 そうよね。ただ、さっきの沙耶香たちの様子がおかしかったから。もしかしたら、なんて。

父 やっぱりダチョウかなんかの卵じゃないのか？

母 ダチョウの卵ってこんなに大きいものなの？

父 そりゃあ、ダチョウは人間より大きな鳥なんだから、卵だって人間の子供くらいの大きさがあつたっておかしくは…

父はソファの後ろから本を拾い上げる。

その本はマニユアル本。

母 え？

顔を見合わせる二人。

沙耶香がお腹を入れ替え、徹はクッションを抱えて戻ってくる。

沙耶香 ごめんね。やっぱり体調悪いから、あ！

四人の視線が交錯する。

母 何なの？ これは。

沙耶香 …ダチョウを飼おうと思って卵もらってきたのよ。

徹 そうなんですよ。

父 ほら、母さん、やっぱりダチョウの卵なんだよ。

母 じゃあこの本は何なの？

沙耶香 …それは知り合いが書いたSF小説で。

徹 そうそう。で、その卵もその人が置いていって。

沙耶香 もう本当に迷惑な話よね。

徹 困っちゃうよな。

無理やり笑う徹と沙耶香。

母は沙耶香のお腹を掴む。

父 母さん、妊婦に何て事を。
母 ・・中身はどうしたの？
沙耶香 ・・その中よ。

みんなの視線は卵へ。

母 何言ってるの？ あなたおかしくなったの？

徹 違うんです、お母さん。これは

母 あなたは黙ってなさい！

徹 はい。

沙耶香 先月、お腹が痛くなって、トイレに行ったら卵産んじやつたの。

母 だから人間は卵を産まないのよ。

沙耶香 でも、こうして産んじやつてるでしょ。ちゃんと産婦人科の先生にも診てもらったし。こうやってマニュアル本ももらったし。

徹 九州地方では時々ある事だって

母 あなたは黙ってなさい！

徹 はい。

母 お母さんの知り合いの祈祷師の先生を呼ぶから今度お払いしてもらいなさい。

沙耶香 お母さん。

母 これはきつと呪いよ。あなたが子供の頃、夜店で売ってたカラ―ひよこを死なせてしまったからなのよ。

父 母さん、落ち着きなさい。

母 何を落ち着いてるの、お父さん！ 意味わかってるの？

父 わからん。

母 じゃあ、黙ってなさいよ。

父 しかし！ よくわからないから、ちゃんと話を聞かないとわからん、と思うのだが。わかるか？

母 ？

父 この卵は沙耶香が産んだんだな。

徹 そうです。

沙耶香 さっき言った通りよ。私だって信じられないけど、ちゃん

父 だったら、この卵が私たちの孫といふことになる。

母 卵が孫。たまごまご：・

父　しっかりしなさい、母さん！　　こういう時、沙耶香が頼りに出来るのは親だけなんだぞ。

徹が自己主張をする。

父　親と夫だけなんだぞ。

徹　そうですよね、お父さん！

沙耶香　信じてくれるの？

父　当たり前だ。親と夫が信じなくてどうする。

沙耶香　お父さん。

母　あなた。

徹　今は卵ですけど、ちゃんと予定日には殻を割って産まれてくるそうです。

母　鳥に似てたりするの？

徹　僕らに似た人間の子供ですよ。

母　ほんとうなのね。

沙耶香　お医者さんもそう言ってるのよ。

母　そう。

父　とりあえず、座ってゆっくり話を聞こうか。

徹　じゃあ、コーヒー入れてきますね。

父　ああ、コーヒー大好き。

徹は台所へ。

父　た：：孫：：

暗転。

へ四場へ

父と医者がいる。

父　まさか、娘はカモノハシになった、と。

医者　いいえ、今でも娘さんは人間ですよ。

父　でも今、先生は「哺乳類でも卵を産む動物はいます」と。

医者　はい。

父　「それはカモノハシだ」と。

医者 はい。

父 だから三段論法的に「娘はカモノハシだ」と。

医者 だから、そうは言ってません。参考までに、そういう動物もいる、というお話を少しだけでも安心していただければ、と思つたのです。

父 先生、カモノハシはどうして卵を産むんですか。

医者 進化の過程でそうなつたんだそうです。カモノハシは爬虫類の性質を持ったまま哺乳類になつたと言われています。

父 すると、娘は進化の過程を逆戻りしている、ということですか？

医者 そうではありません。

父 娘は哺乳類から段々と爬虫類への道を歩んでいくのですか？
このまま進化の過程を逆戻りして娘と私たちはどうなつてしま
うのでしょうか？ そんなことつてあるんですか？ 進化論は
どうなるんですか？ ダーウィンさんは何て言つてるんです
か？ 助けてくださいよ！ ダーウィンさん！

医者 落ち着いてください。私はダーウィンさんではありません。

父 すみません。

医者 とりあえず娘さんは他に異常はありませんから。

父 本当に？

医者 はい。卵を産んだ、ということ以外にはどこにも異常はあり
ませんからご安心下さい。

父 そうですか。それなら……でも卵を産んだってことは、すごく大
きな異常ではないんですか？

医者 ……ところで今日は何でまた、お父さんが。

父 ああ、私ですか。私は卵の見張りを。

医者 見張り？

父 はい。娘夫婦は共働きで、娘も世間的には妊娠八ヶ月。産休に
入るのは来月から。ですから私が、おっと、時間だ。

父 は転卵運動を始める。

医者 それでお父さんが。

父 私は先日退職したばかりで時間に余裕はありませんから。

医者 定年退職ですか。お若く見えますよ。

父 まだそんな年齢ではありません。会社が厳しくなつて、早期退
職というか、希望退職というか。

医者 これは失礼。

父 いえ。これも最近の流行ですからねえ。
医者 流行の最先端ですね。
父 おだてないで下さい。
医者 ところで奥さんは？
父 妻は働いています。
医者 ああ、それでこちらには。
父 それもありますか？
医者 と、言うか？
父 妻は、忘れようとしています。
医者 何を？
父 この卵を見たという事を。
医者 しかし、これはここに実際にあるわけですし。
父 妻はこの状況をよく飲み込めません。自分の理解の出来る範囲で物事を考えようとしているんです。だから、自分の孫はまだ娘のお腹の中にいる、ということにしたんです。
医者 現実とは関係無しに？
父 はい。でも世間的には娘は妊娠八ヶ月ですから。
医者 まあ、世間的には。
父 ですから妻も、その世間にならうということなんです。
医者 そうですか。それで、この状況を理解出来ているお父さんが
父 いえ、先生。私もこの状況はよく飲み込めてないんです。でも誰かがこの卵を転がしてあげてないと、娘のあの膨らんだお腹からは孫は産まれてこないんだ、ということは何となく理解しているつもりです。
医者 その理解の仕方を何とフォローすればよいのか。
父 私も何を言っているのか。でもそう言っている私も時々不安にはなるんです。
医者 何ですか？
父 この卵から本当に人間が産まれるのでしょうか？
医者 ……

暗転。

〈五場〉

明かりがつく。
管理人と朱美が部屋の隅に置いてある卵を見ている。

管理人 平堀さん。
朱美 何ですか、管理人さん。
管理人 あれですかね。
朱美 あれですよ。
管理人 ダチョウにしては大きいですね。
朱美 管理人さん、ダチョウの卵見たことあるんですか？
管理人 いいえ、見たことはないです。
朱美 だったら大きいかなんてわからないでしょ。
管理人 でもあれはかなり大きい。
朱美 他のもっと大きい動物のものだったらどうします？
管理人 大きいって？
朱美 例えば、ゾウ、とか。
管理人 それは、困りますね。
朱美 でしょ。ここ二階ですし。
管理人 床が抜けたら大変だ。
朱美 ですから、管理人さん。
管理人 何ですか、平堀さん。
朱美 ここは一つ、しっかりと注意してもらわないと。
管理人 私がですか？
朱美 だって管理人でしょ。
管理人 はい。
朱美 お願いしますよ。
管理人 しかし、平堀さん。
朱美 何ですか、管理人さん。
管理人 ゾウ、って卵産むんでしょか？
朱美 ……

沙耶香がお茶を持ってやってくる。

沙耶香 どうぞ。
管理人 どうも。
沙耶香 で、お話というのは。
管理人 ええ：。
朱美 管理人さん。
管理人 はい：。いただきます。

お茶を飲む管理人。

管理人 変わった味のお茶ですね。

沙耶香 実家から両親が持ってきたドクダミ茶です。

管理人 はあ、どうりで。

朱美 管理人さん。

管理人 はい。：・ところで、あれは何ですか。

沙耶香 安産のお守りです。

管理人 ああ、安産の。

沙耶香 はい。実家から両親が持ってきたんですよ。

管理人 そうなんですか。

沙耶香 そうなんですよ。

管理人と沙耶香は笑顔。

朱美 管理人さん。

管理人 お守りなんだそうです。

朱美 私も聞いてました。

管理人 では、そういうことで、失礼します。

朱美 管理人さん。

管理人 だって。

沙耶香 何か？

朱美 あの、あくまで噂なんです。このマンションにゾウを飼っている人がいるっていう噂があるんですよ。

沙耶香 ゾウ？

朱美 ゾウ。

沙耶香 そうなんですか。

管理人 ゾウなんですよ。

朱美 ：・それで管理人さんが、調べたいっていうものだから。

管理人 いえ、私はゾウなんて。

沙耶香 でも、ゾウを飼っていたら大変ですよ。

管理人 ええ、困ります。

朱美 で。

沙耶香 で？

朱美 あれがゾウの卵なんじゃないかって。管理人さんが。

管理人 え？

朱美 そうですよ。

管理人 ええ、そうだと困りますね。ここは二階ですし。

朱美 どうなんでしょう？

沙耶香 管理人さん。

管理人 はい。

沙耶香 ゴウは卵を産みませんよ。

管理人 そうですよね。

沙耶香 ゴウですもの。

管理人 ゴウですものね。だそうです。

朱美 じゃあ、これは。

沙耶香 お守りです。

管理人 お守りですね。

父、出てきて転卵運動をする。

朱美 あれは？

沙耶香 父です。

朱美 いえ、お守りに何をしていますか？

沙耶香 それは：・

管理人 お百度参りみたいなの。

沙耶香 そうなんです。お百度参りみたいなもの、らしいですよ。

暗くなる。

管理人と朱美のみの明かり。

朱美 管理人さん。

管理人 何ですか、平堀さん。

朱美 やっぱりあの卵、怪しいと思いませんか？

管理人 あのお守りですか？

朱美 管理人さん、「お守り」っていう話、信じてるんですか？

管理人 だって、お守りなんですよ。

朱美 爆弾だったらどうします？

管理人 爆弾？

朱美 そうです。

管理人 爆弾卵ですか。

朱美 そうです。

管理人 ゆで卵を作ろうと思って生卵を電子レンジに入れると爆発するそうですね。

朱美 ……テロリストだったりしたら？
管理人 それは困ります。
朱美 でしょ。このマンションが戦場になってしまいます。
管理人 それは大袈裟です。
朱美 大袈裟って、何かあってからじゃ遅いんですよ。
管理人 そうですけど。
朱美 だから管理人さん。
管理人 何ですか？ 平堀さん。
朱美 ここは一つ管理人さん自ら。
管理人 私がですか？
朱美 このマンションの平和を守るためです。

暗転。

へ六場へ

沙耶香、徹、医者がいる。
医者は卵に聴診器を当てている。

徹 実は聞きたいことがあるんです。
医者 何ですか？
徹 でこっばちって、どのくらいでこっばちになるんでしょうか？
医者 ああ、卵を割る時の。
徹 そうです。
沙耶香 あんまり目立つのも、ねえ。
医者 九州の病院からもらった写真、見せましょうか？
沙耶香 あるんですか？

医者は写真を出す。

医者 出産直後が、こんな感じ。
徹 ちよつとでこっばち、かな…
医者 半年経つと、こんな感じ。
沙耶香 目立たなくなるのね。
医者 で、大きくなると、こんな感じ。
沙耶香・徹 うわ！
医者 失礼。これは違う写真ですね。で、一年経つとこんな感じ。

沙耶香 心配するほどでもないか。
徹 そうだな。

父がやってくる。

父 何を見てるんだ？

徹 卵から産まれた子供の写真です。

沙耶香 お父さんも見る？

父 え？

沙耶香 怖がること無いわよ。

父 怖がってなんか無いぞ。

父は写真を受け取る。

父 うわ！

徹 それは違う写真です。

父 びっくりした。…なんだ普通の子供じゃないか。

沙耶香 でしょ。

医者 他に、聞きたいことがあったらこの機会に。

沙耶香 じゃあ、もう一つ。気になってたことなんですけど。へそ

の緒はどうなるんでしょうか？

医者 残念ですが、へその緒はありません。

沙耶香 そうなんですか。

父 まさか「おへそも無い」なんてことはないですよね。

徹 まさか、そんなことは…

医者 …

沙耶香 先生？

医者 通常、卵で産まれる動物にはおへそはありませんが…

徹 そんな。

沙耶香 学校の身体測定の時、いじめられたりしないかしら。

徹 あだ名が「たまごちゃん」ならまだしも、「カエルちゃん」にな

ったらどうするんですか。でこっぱちでカエルで、お嫁にいけ

ないじゃないですか！ いや、お嫁に行かないのはそれはそれ

で…いや、そうじゃない！

父 徹君、落ち着きなさい。まだ嫁にいけないと決まったわけじゃ

ないんだ。

徹 そういう事を言ってるんじゃないんです。

父 確かに娘が嫁に行くときは寂しいものだ。君も知っての通り、私にも経験がある。しかし、これも娘を持ったものの宿命なんだよ。

徹 お父さん。

父 徹君。

医者 写真見ます？

医者は沙耶香に写真を渡す。

沙耶香 おへそ、ある。

徹・父 え？

三人は写真を見る。

医者 卵の中の養分はおへそから取っていて、出産直前にはそのへその緒も養分にしてしまうため、無くなってしまうんです。しかし、その跡がこのように残るんです。生命の神秘ですね。

父 普通のおへそだ。

沙耶香 おどかさないでくださいよ。

徹 先生も人が悪いなあ。一時はどうなるかと思いましたよ。ねえ、

お父さん。

父 そうだね、徹君。

医者 変な先入観は捨てて、もっと大らかに産まれてくる子供を迎えましょう。

徹 言われなくてもわかってますよ。

医者 そうですか？ もう一度自分の胸に手を当ててよく考えてください。

みんなは自分の胸に手を当てる。

医者 例え、生まれてくる子がでこっぱちでも、おへそが無くても、例え「男の子だったとしても」。それは紛れも無くあなたたちの子供なんですよ。

徹 ……先生。

医者 わかりましたか。

徹 はい。私は少し先入観を持ち過ぎていました。

沙耶香 そうね。へその緒なんて、この際小さなことよね。

父 残念だな。うちにはまだ沙耶香のへその緒があるんだ。
徹 そう考えると、少し寂しい気もするなあ。

医者 九州では、残った卵の殻をお守りとして大事に取っているらしいですよ。

沙耶香 それはいい考えね。

父 そうしたら、実家にももらえるかな。

徹 大丈夫ですよ。こんなに大きいんですから。

父 沙耶香のへその緒と、孫の卵の殻と……

父のみの明かり。

父は電話をしている。

もう一つ、電話をしている母のみの明かり。

父 そろそろ沙耶香も出産だな。

母 そうですね。

父 出産と言うのかな。

母 出産ですよ。

父 う化、と

母 出産です。

父 ……母さんも、見に来ないか。

母 私は仕事があるし。そんなに焦らなくても。

父 だが、産まれる前にだね

母 産まれてからでいいじゃありませんか。

間。

父 母さん。実は、沙耶香はもう出産したんだよ。卵をね。

母 私は知りませんよ。

父 でも母さん。

母 お父さん知ってます？ 人間は卵を産まないんですよ。

父 でも沙耶香は卵を産んだんだよ。……卵もなあ、毎日転がしてると可愛いもんだぞ。沙耶香が産まれたばかりの時もこんなだったなあ、って。思い出すよ。泣いたりおもらししたりしないのが物足りないぐらいだ。時々心配になって耳を当てるんだが、聞こえるんだ。ちゃんとあの卵は生きてるんだ。あの卵から私たちの孫が産まれてくるんだよ。どうだ、来てみないか。

母 ……でも、私。どんな顔してあの卵と会ったらいいか。

父 戸惑うのはわかる。私もやっと慣れたところだ。だがな、一番
戸惑ってるのは沙耶香なんだよ。
母 お父さん。
父 とにかく、来なさい。

暗転。

へ七場

管理人と朱美がこっそりとやってくる。

管理人 平堀さん。

朱美 何ですか、管理人さん。

管理人 勝手に上がり込むのはまずいんじゃないですか？

朱美 何を今さら言い出すんですか。たまたま鍵が開いていたから、
ちよつと中で待たせてもらってることですよ。

管理人 いや、お父さんが鍵をかけ忘れて出かけた隙に

朱美 これも、このマンションの平和を守るためです。

朱美は持参した聴診器を卵に当てる。

朱美 管理人さん。

管理人 何か聞こえますか？

朱美は聴診器を管理人に渡す。

朱美 聞こえるでしょ。

管理人 本当だ。

朱美 時限爆弾ですよ。

管理人 しかし、カチカチではなく、ドツドツって聞こえるんです
が。

朱美 どっちにしろ爆発までの時間を刻んでるんですよ。

管理人 爆発するんですか？

朱美 そうですよ。爆弾なんですから。

管理人 いつ爆発するんですか？

朱美 それをこれから調べなければ……

管理人 平堀さん。

朱美 何ですか、管理人さん。
管理人 戻って来たようです。

二人は隠れる。

父が来る。

遅れて母がゆつくりと来る。

父 母さん。

母 だってお父さん。

父 いつまでも怖がってちゃ

母 怖がってなんかいませんよ。

父 ほら見てみなさい。

母 …やっぱり卵ね。

父 そうだ、卵だよ。ちよつと触ってみなさい。

父に促されて、母は恐る恐る卵に触る。

父 ほら、噛み付いたりしないだろ。

母 卵が噛み付いたりしませんよ。

父 耳つけてみる。

父に促されて、母は恐る恐る卵に耳をつける。

母 お父さん。聞こえますよ。

父 そうだろ。

母 ということは。

父 いくら私たちが悩んでいても、この子はここでちゃんと生きてるんだ。

母 そうなんですネ。…もうすぐなんですネ。

父 そうだ、もうすぐだ。…どうした。

母 だって、いよいよか、と思うと不安じゃないですか。

父 でも、私たちがいくらがんばっても、どうもしようがないんだから。

母 そうですネ。

父と母は去る。

管理人と朱美が来る。

管理人 あれは、ご両親ですね。

朱美 お母さんの方はかなり怯えてましたよ。

管理人 でも、最後は納得されていたような。

朱美 管理人さん。

管理人 何ですか、平堀さん。

朱美 聞こえてました？

管理人 何をです？

朱美 二人が「もうすぐだ」っていうような話をしていたのを。

管理人 ああ、言っていましたね「もうすぐだ」って。

朱美 やっぱりもうすぐ爆発の時が迫っているんですよ。

管理人 どうでしょう。

朱美 どうするって？

管理人 このマンションの平和を守るために。我々は。

朱美 そうですね。まず、この卵をどこかにやってしまいましょう。

管理人 どうして？

朱美 とりあえず、このマンションで爆発されては困るでしょ。

管理人 はい困ります。

朱美 では運び出しましょう。

管理人 でも平堀さん。

朱美 何ですか、管理人さん。

管理人 「このマンション以外で爆発すればいい」という考え方は、

人間的にダメな考え方ではないかと。

朱美 ・・管理人さん、たまにまともな事言いますね。

管理人 たまに？ ですか？

朱美 ・・では、警察に相談しましょう。

管理人 そうですね。

二人はこっそりと玄関の方へ去る。

すぐに戻ってきて奥へ隠れる。

徹と沙耶香が入ってくる。

徹 お母さんも来てくれて良かったじゃないか。

沙耶香 でも、まだ納得してないかも。

徹 大丈夫、いざれわかってくれるさ。

沙耶香 だといいんだけど。

沙耶香と徹は卵を見る。

沙耶香 もうすぐなのね。

徹 ああ。どんな子が産まれてくるのかなあ。

沙耶香 どんな子でも、ね。

徹 わかってるよ。

沙耶香 男の子でも。

徹 もう、そんなことにこだわったりしてないって。

沙耶香 そうね。

徹 男でも女でも大丈夫なように、名前も、男の子用と女の子用で

最終候補をまとめてるところなんだ。

沙耶香 ひよつとして、昨日の夜やってたのって、それ？

徹 まあな。見たい？

沙耶香 もちろん。

徹 じゃあちよつと待ってる。持ってくるから。

沙耶香 うん。

徹、奥の部屋に行く。

徹の声 うわ！

沙耶香 徹？

管理人と朱美が出てくる。

沙耶香 何でこんなところにいるんですか。

朱美 いやあ、ちよつと。

沙耶香 ちよつと、何なんですか？

朱美 ……

管理人 平堀さん。

朱美 何ですか、管理人さん。

管理人 ここは正直に言った方がいいですよ。

沙耶香 正直に、何ですか？

朱美 ええ。実はさつき、部屋の前を通りがかったら、お父様が「中

に入ってお茶でも飲んでいけ」というものだから。

沙耶香 お父さんが？

朱美 そうですよ！ 管理人さん。

管理人 え？

父が来る。

父 何を騒いでるんだ？

四人が出会う。

父と管理人と朱美はあいさつをする。

父 これはどうも。お客さんが来ていたとは知らずに。お茶でも入れましょうか。

沙耶香 どういうことですか？

父 え？

管理人 平堀さん。仕方ありませんよ、本当の事をお話ししましょう。

朱美 そうですね。

沙耶香 お話していただけるんですね。

管理人 はい。：：実は私たちは、このマンションの平和を守るために、ここに來ているんです。

間。

父 ところで徹君は？

沙耶香 そういえば。徹は無事なんですか？

管理人 はい。私たちは何もしてませんよ。

朱美 一人で奥で気絶してます。

沙耶香 え？

管理人 よほど驚いたんでしょうね。

沙耶香は奥の部屋へ。

管理人と朱美は帰ろうとする。

しかし、父が行く方を阻む。

朱美 では、そういうことで。失礼します。

父 いえいえ、せっかくですのお茶でもどうですか。

朱美 いえいえ、そんな。

父 いえいえ、そんなこと言わずに。

朱美 いえいえ、お構いなく。

父 いえいえ、何でしたらドクダミ茶もありますので。

朱美 いえいえ
管理人 ドクダミ茶はおいしいですよ。
朱美 管理人さん！

奥から沙耶香と徹が来る。

徹 びっくりした。

沙耶香 だからって、気絶することないでしょ。

徹 気絶した自分にびっくりした。

管理人 大丈夫でしたか。

徹 はい。ご心配おかけしました。

管理人 いえいえ。

朱美 では、そういうことで。

管理人と朱美は帰ろうとする。

しかし、父が行く方を阻む。

朱美 そこを通してもらえませんかね。

父 そういうわけにもいきません。何なら警察を呼びましょうか。

沙耶香 お父さん。

朱美 いいですよ。

管理人 平堀さん。

朱美 でも、警察を呼んで困るのは、あなた方なんじゃないですか？

朱美は卵のところへ行き、卵を抱える。

みんな あ！

沙耶香 何をするの。

朱美 この卵のことが世間に知られると、まずいんじゃないやありませんか？

徹 それは……

管理人 あれはただのお守りなんでしょ？

誰も答えない。

管理人 え？

朱美 そういうことですよ管理人さん。これはただのお守りなんか

じゃないんですよ。

沙耶香 卵をどうするつもりですか。

朱美 爆破装置をはずしなさい。

徹 爆破装置？

管理人 このマンシヨンの平和を守るためです。

父 卵に爆破装置なんか付いてるわけないだろ。

朱美 惚けないで。これが時限爆弾だという事はこの平堀朱美、まるっと全てお見通しなんだよ。

徹、気絶しそうになる。

沙耶香 徹。

父 徹君。

徹 お父さん。

父 徹君、沙耶香。こうなったら本当の事を話すしかないだろう。

沙耶香 ……そうね。

朱美 本当の事？

沙耶香 実は、それは私が産んだ卵なんです。

朱美・管理人 え？

沙耶香 私、卵を産んでしまったんです。

間。

朱美 そんな冗談を言って、どうする気ですか？ 人間はゾウと同

じで卵を産まないんですよ。

管理人 そうですね。

沙耶香 でも、本当なんです。

徹 信じてください。

管理人 平堀さん。

朱美 何ですか、管理人さん。

管理人は沙耶香のお腹を指差す。

朱美 あ！

管理人と朱美は沙耶香のお腹と卵を見比べる。

朱美 まさか。

徹 そうなんです。沙耶香のお腹の中にあつた卵が、今、そこにあるんです。

朱美 確かに奥さんのお腹が凹んでて、この卵がここにある。じゃあ、まさかこの中に子供が？

沙耶香 そうなんです。その卵の中に私たちの子供がいるんです。

徹 男の子か女の子かはまだわかりませんが。

朱美 管理人さん。

管理人 しかし、私たちが初めて爆弾卵を見た時、奥さんのお腹は膨らんでいましたね。

沙耶香 それは

朱美 そうです。そのとおりです、管理人さん。確かにあの時奥さんのお腹は膨らんでいました。うっかりテロリストに騙されるところでしたね。

管理人 はい。

徹 その時の沙耶香のお腹の中には

朱美 えーい、黙れ黙れ！この期に及んで見苦しいぞ。この桜吹雪が目に入らぬか。

管理人が桜吹雪を撒く。

朱美 だいたい、人間が卵を産む、という話からして怪しいと思つてたんだ。

沙耶香 お父さん、どうしよう。

父 仕方ない。「郷に入つては郷に従え」だ。

沙耶香 え？

父 は、は、はー！バレちゃあしようがねえな。

沙耶香・徹 お父さん？

父 いかにも人間は卵を産まない。しかし我々は卵を産むのだよ。

沙耶香・徹 え？

父 何故なら、我々はカモノハシだからだ。

間。

父 何故なら、我々はカモノハシ親子だからなんだ。

朱美 カモノハシ、って？

管理人 単孔類カモノハシ科の哺乳動物のことです。

沙耶香 お父さん。

父 とりあえず、こうやって時間を稼ごう。

徹 時間を稼いだ後は？

父 ……

医者の声 そのままだと爆発しますよ。

医者が来る。

沙耶香 先生。

医者 あなたたちも離れて。

徹 どういうことなんですか？

医者 ここは私に任せて。そうしないと爆発するかもしれませんよ。

沙耶香・徹・父は一旦離れる。

朱美 あなたは博士なんですね。

医者 いかにも。

朱美 やっぱりこれは爆弾なんだ。

医者 はい。だからそれ以上揺り動かすと、大爆発してこのマンションは火の海になります。

朱美 え！

管理人 平堀さん、私たちはこのマンションの平和を守らなければいけないんですよ。

朱美 その私たちがこのマンションを火の海には出来ません。

管理人 そうです。

朱美 どうすれば。

医者 まず、その爆弾を安全な場所に置いてください。

朱美 このソファーでいいですか。

医者 はい。

朱美は慎重に卵をソファーの上に置く。

朱美 爆破装置の解除は？

医者 私がやります。危ないから離れて。

朱美と管理人は離れる。

医者は卵に聴診器を当てる。

朱美 博士？

沙耶香 先生？

医者 ……まずい。

管理人 爆発するんですか？

医者 陣痛が始まっている。

朱美 陣痛って？

母が来る。

母 陣痛が始まったの？（沙耶香のお腹に手を置く）

沙耶香 私じゃなくて、卵が…あいたたた、

徹 沙耶香？ どうした？

沙耶香 お腹が…

父 おまえが陣痛になってどうする・

沙耶香 だって本当に痛いよ。

医者 どうやら見えない何かで繋がっているようですね。

徹 どちらから子供は産まれるんですか？

医者 落ち着いて。今、子供がいるのは卵の方です。

沙耶香 先生、私はどうすれば？

医者 せっかくだから卵を抱えてみましょう。

沙耶香はソファーに座り、卵を抱える。

医者 子供と呼吸を合わせてみましょう。

沙耶香 ひっ、ひっ、ふうく

母 私たちは？

医者 では、お湯を用意して。

母 産湯ね。

父 卵から産まれても必要なんですか？

医者 やっぱり産まれてきたら、一風呂浴びたいでしょう。

父 そうですね。

父と母は出ていく。

徹 先生、俺は？

医者 子供が卵を割るのを手伝いましょう。

徹 はい。(大きく振りかぶる)
医者 力任せにしない！ あくまで子供のリズムに合わせて。
徹 はい。

徹は卵に手をあて、やさしくノックするように
「コツ、コツ」

朱美 管理人さん。

管理人 何ですか？ 平堀さん。

朱美 どういうことでしょうか？

管理人 どうやら子供が産まれるようです。

朱美 でも、奥さんのお腹は、

管理人 ですから卵から産まれるんです。

朱美 爆発はしないんですね？

管理人 そうです。このマンションは救われたのです。

朱美 では、我々は？

管理人 このマンションの平和を守るために。

朱美と管理人も沙耶香と呼吸を合わせる。

父と母がタライを持って戻ってくる。

父 持ってきました。

医者 そこに置いて。

沙耶香 あ、何か出そう。

徹 先生、かなりの手ごたえが。

医者 続けて。

全員 ひっ、ひっ、ふうく、ひっ、ひっ、ふうく

沙耶香 あ！

全員 あ！

暗転。

赤ちゃんの泣き声が響く。

— 幕 —